

## 読賣新聞

2017年  
8月27日

## 対中外交の蹉跌

片山和之著

上海総領事を務めている外交官の著者が、上海を切り口に日中外交史を振り返るユニークな著作。

上海の歴史や日本との関わりをひもとく、あの地に関わった重光葵や松岡洋右ら11人の外交官の軌跡を振り返る。そこから導き出したのは、外交官の信念と勇気、誠実さが持つ大きな意味、情報収集力や人的つながりの重要性などだ。そこに問題があったからこそ、対米戦と破局につながったのだと著者は結論づける。

戦前、中国には大使館や総領事館などだけで60以上の拠点があったという。そして今も、企業の拠点数などが世界最多クラス。今も昔も、中国との付き合いが「日本の最大の外交課題」というのも過言ではない。外交の難しさと責任の重さを、改めて思い起こさせてくれる一冊だ。（日本橋報社、3600円）（佑）

## 新文化 2017年8月10日



日本橋報社  
**中国関連書**  
**2点話題に**

日本橋報社が、先月号に発売した片山和之の『対中外交の蹉跌 上海と日本人外交官』と、『李徳全』と『松岡洋右』の2点がマスコミで話題になり、様々なメディアの取材が進められている。

『対中外交の蹉跌』の著者は、2015年8月に赴任した現役の上海総領事。上海は戦前、総領事館、公使館、大使館事務所が設置され、日中外交の一大拠点だった。しかし、中国大陸に代表される武官エリートに翻弄され、明治の開国以降も日本の遺産を崩壊させてしまった。日本外交官の役割と限界、対中外交の蹉跌の背景を描き、今後の教訓と提言を述べた。本体3600円。

片山氏は8月1日、東京・池袋にあるIKEE・Bize（旧勤労福祉会館）で講演した後、同3日に会見を行い、50人を超える報道関係者が駆けつけた。

日本橋報社は歴代の日本外交官が上梓した書籍12点を刊行。同書で13点目となる。創業してから21年間で約340点の中国関連書を発行している。

同社の段躍中編集長は「一面の理解を深めるためにいい本を出していきたい『対中外交の蹉跌』」と提言した。



(962)

『対中外交の蹉跌—上海と日本人外交官』著者、片山和之さん



8月初めに一時帰国して片山和之在上海に多くの交流を行なった。

片山氏は1960

## 冷静かつ戦略的WIN-WINの互惠関係を

片山氏は新著『対中外交の蹉跌—上海と日本人外交官』で、上海で活躍した代表的な日本人外交官11人の足跡をたどり、彼らが果たした役割と限界、そして蹉跌の背景と、現代の日中関係への教訓と提言を述べた。

片山氏は新著『対中外交の蹉跌—上海と日本人外交官』で、上海で活躍した代表的な日本人外交官11人の足跡をたどり、彼らが果たした役割と限界、そして蹉跌の背景と、現代の日中関係への教訓と提言を述べた。

視座を提示、多くの読者から評価の声を寄せられた。上海地域と日本との関係の深さについて触れ、上海総領事館のビザ発給件数は175万件（2016年）。今年1月4日の御用開始の申請件数は1日で1万4000件を超過し、史上最高を記録した。全世界の在外公館で発給するビザの3分の1を上海総領事館のみに発給している。

また「上海総領事館の管轄地域（上海市、江蘇省、浙江省、安徽省、江西省）に日本の対中投資の8割、対中貿易の5割、中国内日系企業数の6割、中国在留邦人の5割が集中している」と紹介。これらの数字は、日本と上海地域がいかに重要で緊密な関係を有しているかを象徴している（と強調した）。

これからの日中関係については「経済関係は運命共同体、一国民感情によって左右される不安定な関係から、共通利益に根ざした冷静かつ戦略的なWIN-WINの互惠関係を」と語り、「力強い『戦略的互惠関係の推進』を訴えた。（段躍中）

日本人外交官たちの著書、訳書の書評特集ページは  
<http://jp.duan.jp/241.html>

ご注文は、全国の書店、アマゾンなどをご利用いただけます。トーハン 日販 その他 取次コード：5752

## 上海から見た戦前の日中外交史を出版

かたやま かずゆき  
片山 和之さん(57)

領土、経済、歴史問題など隣国・中国との外交は、日本にとって大きな課題だが、戦前からの対中外交を「上海」というユニークな視点でまとめた『対中外交の蹉跌 上海と日本人外交官』（日本橋報社）を出版した。

取り上げた外交官は、上海で勤務経験のある松岡洋右、重光葵ら11人で、いずれも戦前を代表する文官エリートたち。彼らの回想録などから浮かぶのは「中国大陸で圧倒的な情報収集力や人的ネットワ

ークを持っていた陸軍（武官エリート）に対抗できず、妥協を重ねる姿」だった。中国を巡り米国と対立が深まり、日米戦争につながっていく。

この失敗を踏まえ「台頭する中国とどう関係を築くかが重要。包括的で多層的な分析が必要だ」と説く。

上海にある日本総領事館の現役総領事。外務省に入ってから中国勤務は計5回に及ぶ。総領事公邸に現地の大学生を招いて、お茶などを飲みながらの交流も欠かさない。

## この人



「好き嫌いは別にして、リアルな中国に触れる必要がある。特に、内向き志向といわれる日本の若者に、中国への興味関心を持ってほしい」と呼び掛けた。（五味洋治）  
2017.8.10

## 東京新聞

2017年  
8月10日



# 聞きたい。 片山和之さん



戦前、日本の外交官はなぜ対外交で軍部に翻弄され、取り返しのつかぬ事態を招いてしまったのか。その「蹉跌」の教訓から、現代人は何を学ぶべきか。現役の上海総領事である片山和之氏が「上海」の視座から対外交の近代史を考察した異色の一冊だ。ただ、片山氏は「必ずしも軍部が悪玉で外務省が善玉だ、との構図は当てはまらない」と考えている。

〔昭和12(1937)年

## 対外交の蹉跌 上海と日本人外交官

(日本橋報社・3600円+税)

## 上海総領事による異色の考察

に朝日新聞記者の黒田礼二が『文芸春秋』誌上に書いた『支那騰勢論(中国を懲らしめよ)』に代表された対中強硬世論があり、中国



片山氏はしかし、本質的な問題として、「中国の歴史の流れの方向性を見誤って、『協調』ではなく『対決』の道を選択してしまっ

た結果、中国をめぐる米

一方、軍に異を唱えることが難しい空気が外交官をも包み、中国での情報収集力でも軍部に大きく差をつけられた。『満州事変(昭和6年)から対外交の実

このことは現代日本の対中姿勢にもあてはまる。片山氏は、「情緒的な関係か

への『あなどり』や『おどり』が外務省、軍部、国民にもあった」とみる。結局は、「泥沼化を防ぎえなかつた点で、外務省と軍部にそれほど違いがあったようにはみえない」という。

淳氏の言葉をひいて、「日本の『中国通』には、中国が『他者』(似て非なる相手)という認識が欠けていた」と書いた。顔かたちや皮膚の色も近く、中国文化を色濃く受けた日本からみて、一方的に理想や正義を中国に投影し、期待した反応が得られないと今度は幻滅と失望を感じ、最後はエスカレートする性癖だ。

日本人外交官たちの本のご案内



『日中外交交流回想録』 林祐一著



『日中経済交流の次世代構想』 宮本雄二監修



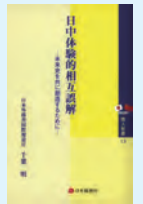
『日中外交関係の改善における環境協力の役割』 宮本雄二監修



『中国のマスクミとの付き合い方』 井出敬二著



『日本の「仕事の鬼」と中国の「酒鬼」』 富田昌宏著



『日中体験の相互理解』 千葉明著



『日中 中日翻訳必携 実戦編Ⅲ』 千葉明著

## 国際貿易

2017年8月1日

産経新聞 2017年8月4日

### 近着の 図書紹介

■『対外交の蹉跌』(片山和之著・日本橋報社・3600円+税)

著者の片山氏は上海総領事。上海を中心に戦前の日本について書かれた1冊。外交官の回顧録、評伝などを参考に執筆した。本書で登場する多くの外交官は外務省の基本方針である国際協調路線に努

める。中国の各界から高い尊敬を集め、親愛された人物もいた。片山氏は、省内に青年将校気取りで、強硬な対外政策推進を主張する「革新派」と称する少壮官僚が存在していたことも指摘。協調路線支持者が志を達成できなかった理由として信念と勇気を費く力に欠けていたことなどを挙げる。著者が外交官を目指した経緯、今後の日中関係についても触れている。

(亜細歩)

### 上海総領事「日中関係、理想的ではない」

片山和之・上海総領事は3日、東京・内幸町の日本記者クラブで会見し、現在の日中関係について「政治関係は改善に向かっているが、まだ理想的な状況ではない」との認識を示した。今年は日中国交正常化から45年の節目に当たるが、両国関係をめぐり微妙な状況が続いている実態を強調。今後の日中関係のあり方について「情緒的な関係から、ドライな共通利益に根ざした関係をつくる必要があるのではないか」と訴えた。片山氏は、戦前期に上海で勤務した日本人外交官の活動をまとめた『対外交の蹉跌―上海と日本人外交官』(日本橋報社)を出版した。

(三塚聖平)